

学 位 論 文 要 旨

氏 名 田本 正一

題 目 市民社会への参加としての社会科教育の開発的研究
— 社会参加とアンラーニングのサイクルとしての学習 —

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

従来の社会科授業は、認知主義に基づく学習観によって構成されてきた。すなわち、自律した個人を前提とし、個人の内面に知識や技能を習得していくことを目的としてきたのである。しかし、このような認知主義に基づく学習観に対して状況論の立場から批判がなされている。概略すれば、人間の行為は、個人の内面に形成されている知識や技能だけでなく、個人が置かれている状況との関係によってなされるという主張である。このような批判に鑑みると、状況論に基づいた学習観の可能性が見えてくる。すなわち、他者や学習資源などのリソースとの関係性に目を向けて社会科授業を構成していくという可能性である。よって、状況論の1つである正統的周辺参加に依拠し、新たな社会科授業の開発を行うこととしたい。正統的周辺参加は、あらゆる学習を共同体への参加としてみなす。このような立場からすれば、どの共同体に参加しているのかが重要となる。さらには、その共同体へ正統的に参加する必要がある。一方、参加の仕方にも周辺的な参加から十全的な参加への移行、あるいは周辺的な参加の仕方がある。社会科授業も何かしらの共同体への参加としての学習であるとみなすことができる。本研究では、参加すべき共同体は市民社会であるとしたい。市民社会へと参加するように社会科授業を構成していくことで、市民の育成を目指していくのである。

一方、学習を共同体への参加とみなす正統的周辺参加によれば、参加すべき共同体が問題となる。望ましい共同体であれば、参加を持続させる。そうすることで、学習者は共同体への十全的な参加へと移行する。しかし、そうでないならば参加を取りやめる、あるいは参加の仕方を変えていくことが重要な問題となる。その原理がアンラーニング（unlearning）である。学習とは、正統的周辺参加によれば、共同体への参加であった。よって、その観点からすれば、新たな学びの型などを組み替えるには参加している共同体への取りやめ、あるいは変更していくこととなる。すなわち、アンラーニングとは共同体への参加をとりやめることである。よって、アンラーニングは、特定の共同体だけに参加することにとどまらず、新たな複数の共同体へ参加していくことができることを可能としていく。正統的周辺参加からすれば、参加すべき共同体が問題となる。すなわち、学校共同体と市民社会が考えられる。しかし、学校共同体へ参加は否定せざるを得ない。学校共同体において意味や価値を有する学習は、必ずしも他の共同体において意味や価値を有するとはとはいえない。なぜなら、正統的周辺参加は知識や技能の転移・応用を否定するからである。よって、学校共同体への参加としての社

会科授業は市民社会への参加としての社会科授業へと転換すべきであろう。

しかし、市民社会へ周边的な参加から十全的な参加への移行のみを考えるべきであろうか。答えは否である。市民社会は、常に変化し続けている。新たな共同体へと変化しても十全的な市民のままで、特定の思考や行為に縛られる恐れがある。よって、程度の差はあるが、変化し続ける共同体においては、学習者は周边的な参加を回復していくことが望ましいのである。すなわち、アンラーニングの指導が必要となるのである。アンラーニングの指導においては、習得した知識や技能を棄却することが考えられる。さらには、市民社会への参加としての社会科授業であるとみなされたものであっても不十分な場合がある。よって、参加する共同体をより市民社会へと転換していくアンラーニングの指導が考えられる。

このように学習を共同体への参加と見なすと、参加のベクトルは、2つ考えることができる。第1は、周辺参加から十全参加へと移行する学習である。周边的な参加から十全的な参加へと移行する学習は、市民として一人前になる学習である。それは社会的論争へ参加し、議論していくことで市民へと変容する軌道を描くことが考えられよう。第2は、十全的な参加から周边的な参加へと移行する学習である。それは前述した多様なアンラーニングの指導を社会科授業において実施することである。それらの原理がアンラーニングによる周边的な参加の回復となる。周边的な参加の回復は、周边的な市民への逆戻りすることを意味しない。それは状況が異なることで従来知識や思考が対応できないことを自覚することで、新たに自己を変容させようとする市民を意味する。それは逆戻りではなく新たな自己の形成を意味するのである。本研究は、この第2の学習に大きな意味を持たせたいのである。さらに、この2つの参加ベクトルは、サイクルとして考えられる。社会参加があり、アンラーニングとしてのサイクルである。このサイクルは、初等社会科、中等社会科ともに共通する原理であり、どの段階においても指導されるべきものであると考えている。

以上のように、本研究は、正統的周辺参加に依拠することで学習を共同体への参加とみなす。すると、社会科学力を社会参加への転換していくこととなる。そのことは新たな授業と学習評価の開発原理を導く。すなわち、その原理が正統的周辺参加に基づく社会参加とアンラーニングなのである。以上を基にして新たな社会科授業と学習評価の開発及び実践的考察を本研究では示している。